

令和 3 年 5 月 17 日現在

機関番号：21601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23385

研究課題名（和文）注意の範囲に基づく反すうの持続過程の検討

研究課題名（英文）Examination of the process of rumination based on the scope of attention

研究代表者

佐藤 秀樹（SATO, Hideki）

福島県立医科大学・公私立大学の部局等・助教

研究者番号：30849097

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は大きく2つの研究で構成され、研究1ではネガティブな話題を長い時間考えることで注意の範囲が狭くなることが示された。研究2ではネガティブ気分を誘導した後に注意の範囲を狭める操作を行うことで反すうが悪化することが示された。また、本研究を遂行するにあたり、患者報告式アウトカム尺度（PROM）の信頼性と妥当性およびPROM研究のバイアスのリスクを評価する必要性が考えられた。そのため、国際的なガイドラインであるCOSMINのリスクチェックリストの翻訳と、COSMINの方法論に基づくPROMの評価に関するレビュー論文を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の結果から、反すうと認知的情報処理の1つである注意の範囲は双方向の因果関係が成立することで反すうが持続することが示唆された。これは、近年注目されている反すうの注意の範囲モデルを支持する知見であることから、このモデルの基礎的知見を提供した点でも意義があると考えられる。また、患者報告式アウトカム尺度（PROM）のバイアスのリスクを評価するチェックリストの翻訳を現在進めており、また、COSMINの方法論に基づくPROMのレビュー論文を作成した。これにより、PROMの信頼性と妥当性について質の高い批判的吟味を行うことが可能になり、PROMを用いる研究全般の質の担保につながると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study mainly consisted of two studies. Study 1 showed that thinking about negative topics for a long time narrowed the range of attention. Study 2 showed that after inducing a negative mood, a manipulation that narrowing the range of attention worsened rumination. In addition, the reliability and validity of the Patient-Reported Outcome Measures (PROM) and the risk of bias in PROM studies needed to be assessed before conducting this study. Therefore, we translated the COSMIN risk of bias checklist, an international guideline, and prepared a review article on the evaluation of PROMs based on COSMIN methodology.

研究分野：臨床心理学

キーワード：反すう 注意の範囲 抑うつ 認知行動療法 患者報告式アウトカム尺度

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

反すうとは、苦痛な症状やその原因・意味・結果について繰り返し考え込んでしまうことと定義され、抑うつ・維持・悪化要因であることが指摘されている(Nolen-Hoeksema et al., 2008)。近年、反すうの維持や悪化を説明するモデルとして、注意の範囲モデルがある(Whitmer & Gotlib, 2013)。このモデルでは、ネガティブな話題を繰り返し考えることで注意の範囲が狭くなり、情報の取り入れ定された思考が繰り返し生じ、反すうが持続すると説明される。

しかしながら、従来の研究には以下の3つの問題点があると考えられた。第1に、従来の反すうと注意の範囲に関する研究は、反すうを特性と捉えた横断研究の結果に基づいているため、反すうと注意の範囲の因果関係は明確にされていない。第2に、従来の反すう操作の手続き(Nolen-Hoeksema & Morrow, 1993)では、思考内容の感情価のみが操作されており、思考時間は検討されていない。第3に、ネガティブ気分下で注意の範囲が狭まることで反すうが悪化するという過程は検討されていない。

2. 研究の目的

上記の問題点をふまえて、本研究では注意の範囲に基づく反すうの持続過程を検討した。本研究は2つの研究で構成され、研究1では、反すうの構成要素である思考の感情価と思考時間を操作したうえで、反すうによる注意の範囲の差異を検討した。研究2では、ネガティブ気分を誘導した後に注意の範囲を操作することで、ネガティブ気分下での注意の範囲による反すうの差異を検討した。

また、本研究を遂行するにあたり、患者報告式アウトカム尺度(PROM)の信頼性と妥当性およびPROM研究のバイアスのリスクを評価する必要性が考えられた。そのため、PROM研究に関する国際的なガイドラインであるCOSMINの原著者から許可を得て、COSMINバイアスのリスクチェックリストの翻訳を行い、COSMINの方法論に基づくPROMの評価に関するナラティブレビューを行った。

3. 研究の方法

3-1. 研究1

研究1では、18歳以上の大学生と大学院生68名を対象に、自己記述式尺度の測定・反すう操作・注意の範囲を検討する課題としてAttentional Breadth Task(Bosmans et al., 2009)を一部修正して実施した。Attentional Breadth Taskでは、ターゲットが近条件の正反応率と遠条件の正反応率の差分値をAttentional Narrowing Index(ANI)として算出した。分析計画として、思考の感情価(ネガティブ、ニュートラル)と思考時間(6分間、1分間)を独立変数、ANIを従属変数とした2要因分散分析を行った。

3-2. 研究2

研究2では、18歳以上の大学生と大学院生42名を対象に、自己記述式尺度の測定・ネガティブ気分誘導・注意の範囲の操作を実施した。分析計画として、注意の範囲(狭条件・広条件)と注意の範囲の操作時期(操作前、操作後)を独立変数、状態反すうを従属変数とした2要因分散分析を行った。

3-3. COSMINバイアスのリスクチェックリストの翻訳およびCOSMINの方法論に基づくPROMの評価に関するナラティブレビュー

COSMINバイアスのリスクチェックリストの翻訳は、PROM研究に関する国際的なガイドラインであるCOSMINの原著者の1人から許可を得て実施された。また、COSMINの方法論に基づくPROMの評価に関するナラティブレビューは、バイアスのリスク、GRADEアプローチ、良い測定特性の基準、コアアウトカムセットと内容的妥当性のガイドラインをキーワードとして、関連する先行研究とガイドラインのナラティブレビューを行った。

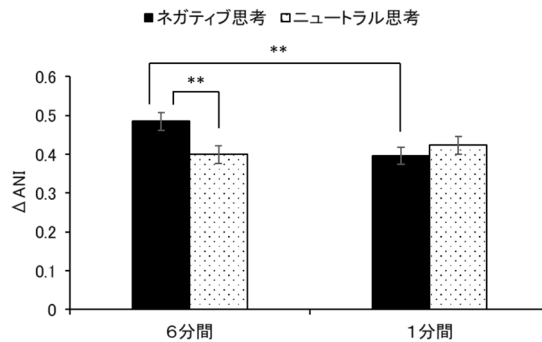
4. 研究成果

4-1. 研究1

研究1の結果から、ネガティブな話題を長く考える操作を行うと状態反すうが悪化することが示され、実験操作の妥当性が確認された。この研究成果は日本健康心理学会第32回大会で発表され、大会優秀発表賞(若手奨励部門)を受賞した。また、ネガティブな話題を長く考えると、注意の範囲が狭くなることが示された(Figure 1)。これらの結果は、査読有の学術誌であるJournal of Health Psychology Researchで公表された。

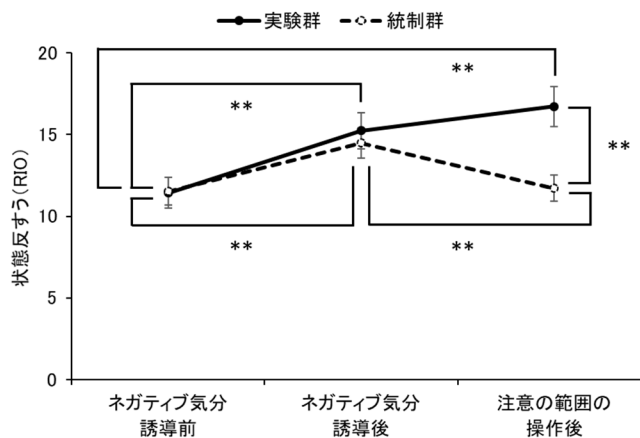
4-2. 研究2

研究2の結果から、ネガティブ気分誘導後の注意の範囲の操作は妥当であったことが確認された。そのうえで、注意の範囲を狭める操作を行うと状態反すうが悪化する可能性が示された(Figure 2)。この研究成果は日本心理学会第84回大会で発表され、公益社団法人日本心理学会学術大会優秀発表賞を受賞した。また、この研究成果は査読有の学術雑誌に投稿を予定している。



Note. $\Delta ANI = \text{Close条件の正反応率} - \text{Far条件の正反応率}$ (値が大きいほど注意の範囲が狭いことを表す)。エラーバーは標準誤差を表す。
 ** $p < .01$

Figure 1 思考の感情価と思考時間による注意の範囲の差異



Note. RIO = Rumination about an Interpersonal Offense Scale日本語版
 エラーバーは標準誤差を表す。
 ** $p < .01$

Figure 2 ネガティブ気分誘導後の注意の範囲の操作による状態反すうの差異

4 3 . COSMIN バイアスのリスクチェックリストの翻訳および COSMIN の方法論に基づく PROM の評価に関するナラティブレビュー

COSMIN バイアスのリスクチェックリストの翻訳は、COSMIN の原著者とやり取りを行い、翻訳内容やその他の疑問点を確認しながら日本語版の作成を進めている。また、COSMIN の方法論に基づく PROM の評価に関するナラティブレビューは執筆が完成し、現在査読有の学術誌に投稿中である。

4 - 4 . 総合考察

本研究の結果から、反すうと認知的情報処理の1つである注意の範囲は双方向の因果関係が成立することで反すうが持続することが示唆された。これは、反すうの注意の範囲モデルを支持する知見であることから、このモデルの基礎的知見を提供した点でも意義があると考えられる。

また、PROM のバイアスのリスクを評価するチェックリストの翻訳を現在進めており、COSMIN の方法論に基づく PROM のレビュー論文を作成した。これにより、PROM の信頼性と妥当性について質の高い批判的吟味を行うことが可能になり、PROM を用いる研究全般の質の担保につながると考えられる。

引用文献

- Bosmans, G., Braet, C., Koster, E., & Raedt, R. D. (2009). Attachment security and attentional breadth toward the attachment figure in middle childhood. *Journal of Clinical Child & Adolescent Psychology, 38*, 872–882.
- Nolen-Hoeksema, S., & Morrow, J. (1993). Effects of rumination and distraction on naturally occurring depressed mood. *Cognition & Emotion, 7*, 561–570.
- Nolen-Hoeksema, S., Wisco, B. E., & Lyubomirsky, S. (2008). Rethinking rumination. *Perspectives on Psychological Science, 3*, 400–424.
- Whitmer, A. J., & Gotlib, I. H. (2013). An attentional scope model of rumination. *Psychological Bulletin, 139*, 1036–1061.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Sato Hideki, Suzuki Shin-ichi	4. 巻 33
2. 論文標題 Differential Effects of rumination on attentional breadth: Examination from valence of thinking contents and thinking time	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of Health Psychology Research	6. 最初と最後の頁 93 ~ 102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11560/jhpr.191206134	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤秀樹・関野拓紀・伊藤理紗・鈴木伸一	4. 巻 14
2. 論文標題 反すうと刺激の感情価による潜在的回避行動の差異の検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 認知療法研究	6. 最初と最後の頁 77 ~ 86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 佐藤秀樹・鈴木伸一
2. 発表標題 反すうによる注意の範囲の差異 思考内容の感情価と思考時間からの検討
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第45回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤秀樹・鈴木伸一
2. 発表標題 新たな反すう誘導課題の作成 思考内容の感情価と思考時間からの検討
3. 学会等名 日本健康心理学会第32回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐藤秀樹・鈴木伸一
2. 発表標題 ネガティブ気分下での注意の範囲が反すうに及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------